

共生・公正・創造



ユニオン・EYE

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治



“テロリストに乗っ取られた”JR東日本の真実”

「マングローブ」ダイジェスト版 第16回

あの「週刊現代」連載記事が【マングローブ】という本になった。本紙は筆者（西岡研介氏）の了解を得て、『謎に包まれた非合法集団とJR東日本の抜き差しならぬ関係』をダイジェスト版として紹介することとした。

インタビュー (1) 革マル派の学園支配を断ち切った8年間の闘い

前早稲田大学総長・奥島孝康氏

「彼らとの闘いが始まってから数年後のことでした。警視庁の捜査員が、私のもとを訪れ、二本の鍵を差し出し、こう言うのです。『失礼ですが、先生のご自宅の鍵ではないですか？それは、革マル派の非公然アジトから押収されたものでした。自宅玄関の鍵は二重にしておりましたが、2本の鍵を、それぞれ差し込むと、スツと間きました。捜査員はこう言いました。『おそらく5、6年は出入りしていたでしょう……』その瞬間、彼らに対する薄気味悪さよりも、震えるような怒りがわいてきました。よし、こうなったら彼らを”自由の杜”から、完全に叩き出してやろうと決意を固めたのです」こう語るのは、前早稲田大学総長の奥島孝康氏(68歳)だ。奥島氏は1994に早稲田大学総長に就任、2002年まで2期8年総長を務めて引退し、現在は学事顧問として、後進の指導にあっている。63年の結党以来、革マル派が最も浸透した大学が、早稲田である。革マル派はその後、対立セクトの中核派や、革労協との壮絶な内ゲバの末、学内を完全に制圧。以降、早稲田大学は30年余にわたって革マル派の「資金源」となってきた。また革マル派系の「全学連」（全日本学生自治会総連合）の歴代三役（委員長、副委員長、書記長）の多くに早大生が就任。学生活動家らによるサークルなどを通じたオルグで、毎年シンパを増やしてきたことから、現在も革マル派の「人材供給源」にもなっている。その革マル派支配下にあった早稲田で、総長在任期間の8年間のすべてを、彼らとの闘いに費やし、ついには学内から革マル派を放逐したのが、奥島氏だった。87年の国鉄分割民営化から20年経った今日もなお、革マル派に支配され続けているJR東日本。その一方で30年余も革マル派に支配されていたにもかかわらず、8年間に及ぶ”死闘”の末、彼らをキャンパスから追放した早稲田大学。この違いはどこにあるのか、奥島氏が革マル派との「わが闘争」を振り返る。「実は彼らとの闘いは、私が総長に就任する前、90年に法学部長に就任したときからすでに始まっていました。いわば『12年戦争』なのです。私が革マル派を追放しなければならぬと決意した第一の理由は、彼らが招いた早稲田の『教育現場の崩壊』にありました。それまで早稲田では、ろくに期末試験が行われたことがなかったのです。というのも毎年12月に革マル派が、『学費値上げ反対』などを掲げ、ストライキ決起集会を開く。ストは必ず決議され、期末試験がレポートに変わるというのが『悪しき慣習』となっていたのです。学生からすれば、テストがなければ、授業に出る必要がない。授業に出る学生が少ないから、教授も手抜きをする。この悪循環の繰り返しで、結局、学生も、教授もまったく勉強しなくなり、教育現場がどんどん荒廃していったのです。それは同時に、大学の運営が歪められてきたことを意味していました。『大学運営への侵害』を認めることは、企業でいえば『経営権への容喙』を許すことと同じ。組織の根幹に関わる問題だったのです」

【マングローブ（講談社）P.318～P.320】